

# とする社会」をめざす

## 「派遣村」から見た日本社会

### イスとりゲーム

失業や雇用不安、格差と貧困が急速に広がり、「派遣切り」という言葉が流行語のように使われている今日の日本。

こうした貧困が、「誰のせいか?」という話をイスとりゲームに例えてみます。

10人に対して8つのイスがあり、音楽が鳴つていてる間にイスのまわりをぐるぐる回って、音楽が止まつたらさつと座る。10人いたら2人が座れないイスとりゲーム。そのときには「注目あるから」。

多くの場合、現代の社会では、その人は座れなかつた2人に注目されてしまします。「何でこの人たちは座れなかつたんだろ?」、その原因を本人の中に探すと必ず何かが見つかります。



▲国会請願デモ（平成21年1月5日）

9月18日（金）午後7時30分から、町民会館わたむきホール虹（大ホール）で、「ふれあい学習会」を開催しました。

昨年末から年始にかけて、東京・日比谷で「年越し派遣村」が開設されました。その派遣村で村長を務めた湯浅誠さんを講師に迎え、「人権を大切にする社会の実現へ・派遣村から見た日本社会」をテーマに貧困問題にスポットをあてて学習会を開催しました。250名の参加者の皆さん、熱心に耳を傾けられました。

講演の概要をお伝えします。

### 貧困と家族の問題

「この人たちはちゃんと音楽を聴いていないかったんだ」「朝食食べてこないからだ」など。なぜ必ず見つかるかというと、完璧な人間はないからです。イスとりゲームをやつて座れなかつたという結果から、「あなたに原因があるんだ」と言えば、誰も反論できないのです。

### 自己責任論!?

「このことを世の中では「自己責任論」という言葉で片付けられています。

今から18年前、平成3年の正規雇用率は82%。イスの数が正規雇用の数だとしたら10人に対してイスは8つありました。

「がんばれば座れるはずだ」と言っているうちに、正規雇用でないアルバイト・パート・派遣などの非正規雇用率はどんどん上がつて、3分の1を超える現在では37・8%。イスは6つまで減つてしまつて、もう10人のうち、4人は座れません。

ぎりぎりまで抱えている家族の悲鳴を社会が十分聞き取つていないと思います。

「派遣村」は派遣切りでホームレス化した人たちを目撃する形で訴えてきたと言われていますが、今後の課題は、家族の貧困をどう目に見える形で訴えていくかだと思います。苦しい中で孤立無援で、歯を食いしばりながらがんばつている家族を、どう社会的に問題にできるかだとも思います。

現在の日本社会は、「あべり台社会」です。本来社会はすべり台ではないはずで、何がトラブルがあつても、社会にはそれを止めてくれるものがあるはずです。そんな社会を作るために、私たちは法整備や社会保障整備などを進めてきたはずです。

しかし今、そのいろいろな歯止めが効かなくなつてすべり台のようになつていています。つまづいたらコロコロ底まで転がる危なつかしい社会です。

地方ではまだ、家族や地域のネットワークがあつて、それ自体は大変良いことです。が、家族がすべり台の途中で踏みとどまりて頑張つてることから、貧困が見えづらいのです。

ぎりぎりまで抱えている家族の悲鳴を社会が十分聞き取つていないと思います。

「派遣村」は派遣切りでホームレス化した人たちを目撃する形で訴えてきたと言われていますが、今後の課題は、家族の貧困をどう目に見える形で訴えていくかだと思います。苦しい中で孤立無援で、歯を食いしばりながらがんばつている家族を、どう社会的に問題にできるかだとも思います。

# 「貧困をなくそう

## 人権を大切にする社会の実現へ

### 貧困のラインは？

日本人の貧困のイメージは、アフリカの難民キャンプのような、生存ぎりぎりラインを想像します。ある年配の方が「このようなことを話されました。

「地域でお葬式があつたら3千円は包まなきゃいけない。でもこの3千円は何日分の食事だと考えてしまう。「これを包むか、何日分のおかずを一品落とすか」という選択を何かあるたびに迫られる。この精神的な追い詰められがりを考えてみてほしい」と。貧困の問題は、生存ぎりぎりのラインだけの問題ではなく、「人間らしい暮らし」というラインがあります。その「人間らしい暮らし」のラインは憲法25条です。

### 《憲法25条》

すべての国民は、健康で文化的な最低限の生活を営む権利を有する。国はすべての生活面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

湯浅  
誠さん



●自己責任論の怖さを知つて自分の考え方を見直す時だと気付きました。これから子供の教育のためにも、今の大人的教育（社会教育）の必要性と大事なのは原点の家庭教育からだと思います。

（20歳代女性）  
(40歳代男性)



▲年越し派遣村の様子

### 参加者の感想から

#### 私たちの手で 生きやすくしていこう

湯浅さんは、終始穏やかな口調で話され、新聞やテレビで見たり、聞いたりした派遣村での出来事を、厚生労働省との交渉も交えて生々しく語っていました。講演の最後には、貧困があるのに認めない社会から「貧困をなくす」とする社会」に変えていくことが大切だと強調されました。そして、「自己責任論」の発想を転換し、ちよつと落ち着いて一息つける社会にするために、まちあげて取り組んでいただければと締めくられました。

NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長、反貧困ネットワーク事務局長他。90年代より野宿者（ホームレス）支援に携わる。「ネットカフェ難民」問題を数年前から指摘し火付け役となるほか、貧困者を食い物にする「貧困ビジネス」を告発するなど、現代日本の貧困問題を現場から訴えつづける。昨年から今年の年末年始「年越し派遣村」では村長を務める。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。1969年東京生まれ。